

# 第5学年2組 国語科「世界でいちばんやかましい音」の授業実践報告

佐賀大学附属小学校 白井雄大

## はじめに

物語文をどのように読むか。これまでの授業では、教師が示した方向性、或いは発問によって導かれ、学習が進んできた。しかし、教師の手を離れたとき、果たして児童は一人で読む力が身に付いているのか。本実践では、児童が主体的になり、問いをもって読み進めていく授業を目指した。

本実践では、児童一人一人に問いをもたせ、その解決を通して中心人物の変容を掴むことをねらいとしている。問いを立てる際には、児童と共に考えた文言例(図1)を示し、参考にできるようにした。本単元の資質・能力「中心人物の変容を捉える」の習得を目指した手立てである。

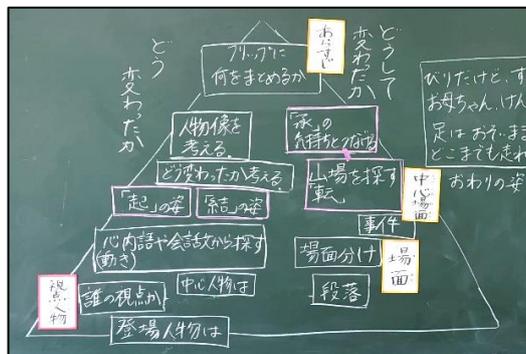


図1 問いの文言例

## 1 本時における主体的・対話的な学びの姿とは

児童は多様な問いをもっている。自分なりの答えを友達に伝え、相手の考えを聞き、共に考え練り合うなかで、問いの解決を図ろうとする。このように、必要感に迫られるなかで話し合い、一生懸命に問いの解決に向かう姿こそが、主体的・対話的に学ぶ姿だと考える。

今回は文言例を示し、ある程度問いの方向性を揃えていたため、大きく分けて「変容」と「山場」を考える問いに分かれていた。本文をまとめたワークシートに書き込んだり、図化したりしながら、問いの解決に向かっていった。その交流場面では、次のような姿が見られた。

一つ目は、似ている問いをもつ児童で集まり、気付いていないところを聞いたり、その根拠を確認したりする姿である。二つ目は、異なる問いをもつ児童で集まり、自分と異なる角度から意見を聞き、共通点を見出している姿(図2)である。割合としては前者の数が多く、分からない友達に教えている児童や、表現の仕方(心情曲線等)に注目して意見を交わす児童が目立った。



図2 本文周りで共通点を見出

## 2 本時における深い学びの姿とは

本単元では、身に付けるべき資質・能力を「中心人物の変容を捉える力」とし、その思考操作として「場面と場面を比べる」を設定した。どう変化したのか、なぜ変化したのかを考えることはできていたが、その考え方をメタ認知することに関しては課題が残った。振り返りの中に、「本時は～のように考えた」というような解決策についての記述があれば良かったのだが、触れているものは全体の2/3程度にとどまった。

解決策に目を向けた振り返りができるようになるためには、共有段階の話し合いが大切になるだろう。教材の読み取り、その根拠を本文に返ることは大切なことだが、「どう考えたのか」「他の物語(言語活動)でも生かせるか」といった問い返しを行い、解決策を共有することも重要だと考える。或いは、ある程度振り返りの型を示す必要もあるだろう。

## おわりに

本実践でも、「問いは解決できたか、できなかったか」「なぜできたのか、どうしていたらできていたか」という二つの型を示して振り返りを書くように伝えていた。それでも解決策に触れた記述が2/3程度だったことを考えると、例えば、実際に児童が書いた振り返りを掲示物として示し、良い書き方の例を広げるなどの手立ても必要だったのだろう。